

---

No title

邑樂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

No title

### 【NZコード】

N5347A

### 【作者名】

邑楽

### 【あらすじ】

すべては輝<sup>あきら</sup>の胸騒ぎから始まつた。幸せな一人の仲を引き裂く交通事故。それによつて、最愛の人、京香<sup>きょうか</sup>を亡<sup>く</sup>した輝は…。

(前書き)

この物語では、付き合っていた二人の、彼女の方が死んでしまいます。苦手な人は読まない方がいいかと思われます。

ポキッ、と小さな音をたてて、シャーペンの芯が折れた。残った芯ではとてもではないがまともに使えるとは思えない。そういうえば、消しゴムも小さくなつてきているな、と京香は思い出した。

「はあ……。」

外には雪が降つておひ、とても寒いだろうと思われる。できれば外出なんでしたくはないのだが、どのみち後で買い物に行かなければならなくなるのであるづ。

「仕方がない……。」

嫌なことはせやめに済ませて後でゆつぐつと温まるつと、京香は厚手のコートをはおり、しぶしぶ外へと買い物に出かけていったのであつた。

「つー寒いー」

外の寒さは京香の想像をはるかに越えていた。もつと厚着をしてくればよかつた、と既に後悔をはじめる京香であったが、今更家に戻るのもなんだと思い、吹きつける雪と風に体を震わせながら近所の文房具店へといつもより少しあはやめに歩みを進めるのであった。雪は一向に止む気配がない。それどころか、ますますひどくなってきた。そのせいで視界が悪く、三十七センチメートル先さえまともに見えやしない。こんなときにもしも車でもきたらと京香が考えた、丁度その時であった。

「京香ー。」

聞き慣れた声が、京香の耳に飛び込んできた。その声が誰のものかなど、京香には考える必要もない。その声の主は、京香の恋人である輝であった。

「輝…どうしたの?」

「それはこっちの台詞だ。こんな時間に一人で外ほつつき歩いてんじゃねーよ。」

「なつ! それは輝も同じでしょーが!」

「俺はいいんだよ、男だから。」

そう言つて京香の腕を掴み、ぐいっ、と自分の方へと引き寄せると、手袋もせずに寒そうに赤くなつている京香の手をそつと包んだ。

「…手袋くらいいして来い。」

少し照れた風に言つ輝の優しさが伝わってくる。京香は、輝のそん

なところが好きだった。ただ、誰にでも同じように優しいと京香は思っているので、そこが少し妬けるのだけれど。しかし、実際はそうではない。京香の思っているとおり、輝は誰にでも優しい。しかし、その何倍も京香に優しい事を、京香自身が気づいていないだけなのだ。

「ありがと。」しつしてると、手袋なんていらないね。す、温かいよ。」

そう言ってにつこつと微笑む京香に、輝は少しだけ下を向いて、顔を赤らめたのであった。

そうして輝は京香の手を温めたまま、京香は輝に手を温めてもらひながら、一人はしばらく歩いていた。

京香は目的の文房具店に向かって、輝はどこへ行くかわからぬけれど、とりあえず京香と一緒に歩いてゆく。

「そういうえば、輝がなんであんな悪いのにあそこへ行ったか、まだ聞いてないんだけど。」

京香が輝に問う。残念ながら輝は、そんな質問に答えることができなかつた。

朝起きた瞬間から、その胸騒ぎは始まっており、最初は氣のせいだ、しばらくしたらなくなるだらつとあまり氣にとめていなかつたのだが、それは時間が経つにつれてひどくなつていつた。ざわざわと自分が侵食していく嫌な感じに、やがては自分のなにかを奪われてい

つてしまつのではないだろうかと、輝はそれに嫌悪感さえも感じたのである。

だからこの寒い中、何時間も京香の家の前で待つていたのだ。何故京香の身に災いが降りかかるのではないか、と思つたのかはわからない。ただ、輝にはそれしか思いあたることがなかつたのだ。

しかし、輝の胸騒ぎは京香に会つた途端、まるで最初から無かつたかのように消えてなくなり、この輝の数時間も無駄ではなかつたことが証明された。

しかし、そんな輝の安心もつかの間。京香の田舎とする文房具店まで数十メートル、再び輝の胸騒ぎが始まつた。

それは朝起きてから…いや、生まれてこのかた経験がしたことのないようなひどいものであり、輝はあまりの苦しさに足をとめ、その場につづくまつてしまつた。そんな輝に、京香も足をとめて屈みこみ、苦しそうにしている輝の顔を心配そつた覗き込んで声をかけた。

「輝…どうかした？」

心配そつに覗き込んでくる京香を、少しでも安心させよつゝと輝は無理矢理に笑顔をつくる。

「いや、どうもない。」

しかし、そんな輝の言葉と笑顔は、京香のたつた一言で崩されてしまつた。

「嘘。」

「い、いや…」

「嘘。ねえ、どうしたの…？」

心配そつに、眉をひそめて京香は問うが、輝にはどうしても本当の

」とが答えられなかつた。

京香の身になにかがおこつそつで、それが不安で仕方がないなどと言つたら、京香は傷ついてしまつのではないだろうかと輝は思ったのである。

本当は言つてもよかつたのかもしない。言つたほうがよかつたのかもしない。しかし、輝は言わなかつた。そのかわりに輝は、絶対に京香を守つてやるうと心に誓つたのであつた。

「行ひ。」

京香の問ひには一切答えず、輝はただ一言やう言つて京香の手をひいた。

文房具店へ行つた、その帰り道。先刻きと違つのは、歩いている方向と、京香が輝とつないでいない方の手に消しゴムとシャーペンの芯が入つた袋を持っているだけであつた。

「京香。」

意味もなく名前を呼んでみる。

「ん？」

返事が返つてくる。ただそれだけの事が、輝には嬉しかつた。しかし…

「…」

まだ。輝は足をとめる。また、身体全体にあの嫌な感じがよみがえる。

「輝…やつぱり、おかしいよ。」

再び輝の心配をする京香。その表情は、いつになくさびしこものであつた。

「ねえ…」

力なく呟くその表情が、しだいに不安そうなものへと変わってゆく。そうさせているのが自分自身だということに、輝は妙な罪悪感を感じてしまう。しかしその反面、京香の表情を見て、可愛いと思つてゐる自分がいるのも事実だ。輝はそんな自分に苦笑をして、氣をひきしめようと、とじふしを握り、勢いよく立ちあがつた。

「いたつー。」

京香の痛つた声。なんと、輝の頭が京香のあいにあたつてしまつたのだ。痛つたのにあいをさする京香に、輝は苦笑をしながら謝る。

「悪い悪い。」

しばらくの間、不満そうに輝を睨んでいた京香であったが、輝がいつも調子に戻つたのを感じ取つたのであつた、ただなにも言わずに、自分の目の前にある輝の手を強く握りしめた。

パツパー！

丁度、京香が輝の手を握った瞬間であつただろうか。  
一台のトランクが耳をつんざくような音を立てて、輝と京香のすぐ傍を通り過ぎていった。

「あーー。」

途端、京香の叫び声。

何事がと思い道路を見ると、そこには先刻買った文房具が、袋ごともに無残な姿で残つていた。

「折角買ったのに……。」

とつあえず京香に怪我はないようだ。  
輝はほつゝと胸をなでおろす。

「また買えばいいだろ。」

朝からの胸騒ぎの原因は、これであつたのだろうか。そつ考へると、あまりに馬鹿らしくて笑いがこみあげてきた。

「へへへへへへ……。」

急に笑い出した輝に、京香は怪訝そうな顔をする。

「輝……ふざけてる?」

「いや……安心したんだ。」

本当に心から安心した。だから、できた笑顔。  
それが、今の輝にはあった。

「安心……。」

京香は、輝に聞こえないよう、小さく呟いた。

ところが、今まで輝はなにかに対して不安を抱いていた、といふことになる。その不安の対象とは、いつたいなんだつたのであるうか。

そして、こんな寒い日に輝はひとりでなにをしていたのだろう。

ふと、京香は気づく。

自分が輝の不安の対象になっていたのであれば、すべて説明がつく、

と。

「じゃ、行くか。」

「あ……うん……」

じわじわと広がつてくる嫌な感じを振り払うかのよつこ、明るい返事をひとつして、いつの間にか離れてしまつていた手を京香はもう一度強く握りなおす。そして、先刻の文房具店へと、向きをかえるのであつた。

そうして二人は京香の家の前で別れた。

京香はそのまま家中へ、まだ不安をすてきれないのだつ、輝はしばらく京香の家の前に立つていて。しかし、部屋のひとつにあかりが灯つたことで電気がついて安心したのであらう。くわんと京香の家に背を向けると、ここからせせめじ遠くもない自身の家へと帰つていつたのである。

でも、これはもう何年も前の話で。

これがただのはじまりにすぎなかつたなんて、京香も俺も、まったく思つてなんかいやしなかつたんだ……。

予兆、再び

あれから何年かが経過し、京香と輝は無事、成人を迎えた。いつしか二人は一緒に住むようになり、とくになにかがあつたわけではないが、平凡で幸せな生活を送っていた。二人が一緒にいることができる。

それだけで、二人は満足だつたのだから。

「輝ー。今日、早く帰つてこられる?」

「ああ。…今日はなにがあるのか?」

「ううん、別になにも。」

「そつか、わかつた。」

笑いながら、優しく京香の頭をなでる輝。

何故、こんなにもささやかな幸せが奪われてしまわなければならなかつたのだろうか。欲を持ち、他になにかを欲したというわけでもない。もし、輝と京香のどちらかひとりでもそう望んだのなら、まだ自業自得ともいえだであろうに。でも、一人は違う。どちらも、

そんなことを望んだりなどしなかつた。

だとしたら、これから一人の身に降りかかる惨事は、なんといわらわせばよいのだろうか。

この「えなほどの、大惨事は。

「ふう…。」

洗濯も掃除も済ませたし、使用済みの食器だけ洗った。さて、今からなにをしようか。

いつもが忙しいものだから、たまにこつして暇ができると、なんだか少し淋しくなってしまう。

少し大きめの椅子に腰掛けた京香は、そんなことを考えていた。しかし、田舎の疲れからか、だんだんと意識がまどろんでゆく。そんなまどろんでゆく意識の中で、京香は夢とも現実ともつかぬ、奇妙な感じにつつまれていつたのであつた。

「こには、どこだろう。

はじめてきたような、それでいてどこか懐かしい。…だけど、この全身にまとわりつくようなねつとりとした嫌な感じはいったいなんなのだろう。

やわらかい闇の中で、京香はひとり佇んでいた。けしてこの闇が嫌なわけではない。むしろ、心地よいくらいの闇だ。それなのに、京香はどこか不安を感じずにはいられなかつたのだ。

どうしたらよいのだろう、と京香はあたりを見渡した。ふと、京香

の瞳に、今までになかったと思われるあるものが映った。

「あれは……、ひかり？」

そう、ひかりなのだ。

しろいほんやりとしたひかりがだんだん大きくなつてゆき、京香の見ている前で、まるでスクリーンのよつに映像を映しだしてゆく。男女と思われる二人組が仲良く手をつないで、一人で歩くには少しばかり狭い歩道を歩いている。どこかで見たような景色だ。

しだいにはつきりとしてくる映像に、京香はあることに気づく。

あれは、私達……？

そう、スクリーンのよつなひかりに映る男女の二人組は、京香と輝だつたのだ。

場所に大体の見当はつこつこ。じゃあ、次に考えるのは時だ。これは、いつたいつのことなのだろうか。

ゆつくりと目をとじ、記憶をさかのぼつてみると、京香にはひとつだけ思いあたることがあった。

ぱつと目をあけたと、よつ記憶を鮮明にわせるため、聞く人のいい心地よい闇の中で、京香はひとりその日のことを呴き始めた。

「朝起きて……そしたらす」に寒くて、外を見たら雪が降つてた。お湯で顔洗つて、歯を磨いて……、アリス……あ、えつと……これは私が飼つてるインコなんだけど……、挨拶して、エサあげて……」

誰に説明するわけでもなく京香はその日のことを語り続ける。言葉を発すことにより鮮明な情景が心に浮かんでゆくことに京香は満足し、ただ闇に吸い込まれるだけとはわかっていないが、京香は語り続けた。

「朝」はん…ってなんだっけ。うーん…ま、いいか。とりあえずなんか食べて、テスト近くでやばいから勉強したの。確か国語だったと思ひ。でも、すぐにあきちゃつたからなんか雑誌読んだりいろいろして、そしたらまたお昼の時間になつたから…なんかできひとつに食べた。」

人の記憶ほど不確かなものはない。自分の都合のよい風にいつの間にかつくりえられていたりするものだから、たまたるものじゃない。特に、これはもう何年も前の話なのだから、これだけ覚えていればたいしたものだといえるであろう。だが、この日のことを京香がこんなにも覚えているということは、それだけ京香にとって印象深い一日のことであつたと考えられる。

「す」じ、口、口して、そしたらまた勉強をしたの。今度はすっかり集中しちゃって、気がついたら五時だつた。あまりにも眠くて、もう集中できそうになかったから、おとなしく眠つた。それで起きたら7時くらいだつたかな…。やばいと思つて、急いで夕飯食べて勉強したら、九時くらいに、シャーペンの芯がきれちゃつて、消しゴムも買ひに行かなきゃつて思つたら、輝にあつたの。」

ふと京香が顔をあげると、スクリーンの中の一人は、あの輝に異変が起つた辺りにせしかかっていた。

「で、あんな寒い夜遅くになにしてるのかなつて思つたんだけど、結局輝は教えてくれなくて、うまくはぐらかされちゃつた。…とりあえず手を温めてもらいながら、今ちょうどスクリーンみたいな映つてる場所辺りで輝がおかしくなつて…。って、あれ？」

スクリーンのようなひかりの中の輝は、京香の記憶のようにおかし

くなどなつたりしなかつた。ただ、先刻と同じように、何事もなく京香と手をつなぎ、歩いている。

自分の記憶が間違っていたのか。それとも、自分が考へている日とはまた、違う日であるのか。

京香は考へてみる。その結果、京香が出した答えはどちらも違つ、というものであった。どちらにしても明確な理由や証拠などはまつたくない。京香は、自分の勘を信じたのだ。

間違つている筈がない、と京香はしつかりと自分に言い聞かせると、もう一度スクリーンをしつかと見据えた。

相変わらず一人は手をつなぎ、歩いている。しばらく見ていると一人は京香の家の近所である文房具店へ入つていた。

そして場面は変わり、文房具店の中。

輝になにかを買う様子は見られず、ただ静かに京香の背中へと視線をそいでいる。京香がレジで買い物を済ませると、一人は店を後にした。

場面は再び外へと戻り、京香の記憶どつりに一人は手をつなぎ、京香自身はそのつないでいないほつた手に先刻買ったものが入つている袋を提げている。

やつぱりこれはあの日の映像だ、と京香は確信した。だとしたら何故、輝はおかしくならないのだろうか。

京香は訝しむが、依然としてひかりはスクリーンのようじ、あの時であり、あの時でない映像を映し続けている。そして、その映像の中の二人は、再びあの地点へとやつてきた。今度もまた、輝にはなんの異常もおこらないまま、平穩に過ぎ去つてゆくのだろうか。

京香は、何故かいつもよりはやくうつている心臓を手でつよくおさえると、すべての集中力を映像へと向けた。

映像の中の一人が一步踏み出すことに、京香の心臓はうつはやさを増してゆく。

絶対にここだ、という正確な位置はわからない。しかし、確実に映像の中の一人は輝に異変が起こる筈であったその場所を、何事もな

く通過していったのだ。

たかが夢の中の映像ではないか。

そういう風にも考えられるかもしない。

輝に異変が起こらなかつたからなんなのだ。

確かに、そうである。

しかし、あの輝の異変があつたからこそ、今の京香たちがあるといふことを忘れてはならないと考えると、とてもなく恐ろしいのだ。もし輝に異変が起こらなかつたら、私たちの未来は、また少し違つたものになつていたのである。

これからなにがおこるのかを見るのが恐ろしくてたまらない。だけど、何故かその映像はとても京香の興味をそそるのだ。自分にあつたかもしれない、今とは違うの未来はなんなのかと。

それに対する興味は、恐ろしいと思う気持ちよりもつよく、スクリーンの方へと視線を向けてしまつ自分の身体に、京香は逆らつたことができなかつた。

輝に異変が起つた筈の地点から、むらたに進んだ辺りのところで、その事件は起きた。

正面からものすごい勢いでやつてきたトラックが、あつといつ間に京香の目の前まで来た。手が強くひかれる感触。耳をつんざくよくなクラクションの音。明るすぎるライトに真つ白になる田の前。それを最後に、京香の意識はぱつりと途切れた。

田の前がぼやける。あれから、どれだけの時間が経つたのかはわからないけれど、未だに田の前が真つ白だ。これは、いつになつたらなおるのだろう。

はやくなおつてくれないものか、と京香は何度も何度も瞬きをする

が、それはまつたくもって意味を成さなかつた。まあそれもあたりまえだらう。今、京香が見ているものは真つ白な天井であり、いくら瞬きをしようはが、その景色が変わる筈がない。

「痛…。」

首が痛い、と京香は身体の向きをかえる。すると、突然飛び込んできたものに、京香は自分の頭がおかしくなんからつていないと知らされた。

じゃあ、今まで見てたのは天井か…。

窓の外には、いつのまにか降っていた雪による辺り一面の銀世界が広がっていた。

ゆつくりと身体を起しすと、こんなにも寒い日だといつにもかかわらず、じつととした汗で服が身体に張り付いていて、気持ちが悪い。

嫌な夢でも見たのだらう、と京香は汗ですっかり濡つてしまつた服を脱ぎながら考えた。

なにかの夢を見たとこだとは覚えていたのだが、どうにもその夢が思い出せない。

しかし、その夢はとても不吉な夢であつた気がする。思い出せるとすると身体の震えが自然と止まらなくなり、心臓のうつむやさがべんと増すのだ。

なにがなんだかわからなくて、とりあえず輝に会つたかった。

「輝…。」

京香は、汗が冷えてすっかり冷たくなつてしまつた自身をつよくつよく抱きしめると、悲痛な叫びをもらした。

「はやく…、はやく帰つてきてよ、輝つ…」

なんの前触れも無く、京香はこきなり田を開いた。身じろぎ一つせずにただ田を開き、ぱち、ぱちと何度も瞬きをする。今まで眠っていたとはとても思えない田の覚ました方だった。

「うーん…」

起き上がって、大きく一つのびをする。  
まだ外は暗く、音からして雨が降っているようだ。  
なにか、とてもなく嫌な夢をみたような気がする。…いや、違う。  
正確には、とてもなく嫌な夢をみた夢をみたんだ。

しかし、どうしても京香にはその「夢の中でみたとてもなく嫌な夢」が思い出せない。

思い出せないくらいだったり、そう大した夢ではなかつたのだろう。  
きっとそうだ、と京香は半ば強制的に自分に思い込ませた。  
なんだかんだとこつても、本当はあの夢を思い出しちまつのが、  
京香にはたまらなく恐かったのだ。

しかし、この時京香がこの夢を思い出せなかつたのは幸いだった。  
もしこの時、京香が夢を思い出しちまつてこたら、きっと気づいてしまつていたであろうから。

いくらかのこじがおかる瞬間がかわいひとも、それからには逃れることができないことこの上ないことを。  
たとえそれが、どんな運命だったとしても…。

それは、突然のことだつた。

関係などまったくないくせに、蠅のようにむらがつてくる野次馬が鬱陶しい。野次馬があんなに鬱陶しいものだったなんて、と輝はあらためて思いしらされた。

なにやら必死に叫んでいる救急隊員も五月蠅くてしかたがない。自分は呼んだおぼえなどないのに、何故来ているのだろうか。

：ああ、そうか。きっと、どこかの優しくて鬱陶しいほどにおつせかいな偽善者さんが呼んでくださつたのだろう。ビリでもいいからほつつておいてくれ。

それに、あのパトカーと救急車は何故あんなにも五月蠅いのだろうか。「なにか」が起こつたのだと知らせ、野次馬を群がらせるだけなのに。ああ、もしかしたらそれが本当の目的なのかもしれない。だとすると、俺たちはとんだ見せ物だ。：なあ、京香？  
なにもかもが五月蠅くて。なにもかもが鬱陶しくて。  
ただひとりになりたい。

たつたそれだけのことを、輝は薄れゆく意識の中ですつと願つていた。

まずはじめに田にどびこんできたのは、真っ白な「なにか」だった。しばらくすると、だんだん田のぼやけもとれてきて、それがどこかの天井であるとこつことがわかつた。

身体のあちこちがぎしづと悲鳴をあげている。いったいなにがかったのだろうか。

輝は本当にそのことを知らないわけではなかった。ただ、知りたくないつだけなのである。

だから、知っているのに知らないふりをして。覚えているのに、うつかり忘れてしまったふりをして。

輝は必死に自分を誤魔化そうとするのだが、あの時の記憶は薄れるどころか、あの時のままの姿で、輝の中に残っていた。

「あ、起きられたんですね。あの、古屋さんのお知り合いでの方ですね……？」

あきらかに営業用と思われる笑顔をつくつて、看護婦さんが輝に話しかける。あの笑顔の裏ではどんなことを考えているのだろうかと輝は思つたが、そこは自分の立ち入るべきところではない、と考えるのをやめた。

「はい、そうです。」

看護婦さんの笑みが妙に強張つてこむ」と、輝は妙に不安を感じる。

「つこてきて、トセー。」

そして、とうとう看護婦さんの顔から、完全に笑みが消えた。

輝は、いつみたいなにがあったのかということを、京香の病室に着く

までに、再び顔に笑みがもどった看護婦さんに話したもらった。そのおかげで、輝は自分の、そして京香の身になにがあったのかをようやく理解したのであった。

といひが、この看護婦さん。今の京香の状態とこゝにちばん肝心なところで口をつぐみ、話してくれない。

あまり問い合わせるのも酷かと思い、そんなに病室までかかるとも思えないのに、輝はなにも言わずに看護婦さんの後へとついく。

ある一室の前で、看護婦さんは足を止めた。どうやら、ここが京香の病室らしい。

看護婦さんは小さく「ここです」と呟くと、やけに神妙そうな顔をしてゆっくりと扉を開けた。

音も何も聞こえず、一瞬時間が止まつたように思えた。

「京香……。」

輝が思わず声をもらす。

この部屋には、見覚えがあった。確かに、昔死んでしまった祖父に別れを告げる時に、この部屋に入ったのだ。当然、その時祖父に意識はなかつたのだが。

だけど、今度は違つかもしれない。京香は、生きているかもしれない。

そんな儚い希望を胸に、輝は京香のいる部屋へと一步踏みだした。入つた瞬間、そんな輝の儚い希望はやすやすと打ち砕かれてしまつた。

真っ白なシーツ。そして、同様に白い、京香の顔にかけられた布。かけられたシーツの下にある、通常ではありえない方向に曲がつてしまつた四肢。しかし、布の下にある顔は、まるで皮肉であるかのように、傷一つなく綺麗なままであった。

あの事故で顔に傷がついていないことは、奇跡に近い、不幸中の幸いだったと輝は聞かされたが、そんな些細な幸せなど、輝に

はこらなかつた。

いつその田など見えなくなつてしまえばよい。

いつそこの耳など聞こえなくなつてしまえばよい。

輝はすべてのことから 逃げ出したかつた。今、この現実からも、すべて。

輝は目を瞑り、耳をふさいで、肉体だけになつてしまつた京香のいる部屋から飛び出した。どんなことをしても、この現実から逃げることなどできない。そんなことは輝自身もわかつていたのだが、どうしてもそのままではいられなかつたのだ。

いや、本当に現実から逃げ出す方法はひとつだけある。それは、死ぬことだ。今の、京香のよう。

「京香…」

綺麗なままに残つたあの顔。それが、もう一度と表情をつくる」とがかなわないのだと考へると、輝はひどく罪悪感に苛まれてしまつ。走るうちにだんだんと火照つてゆく身体とは裏腹に、輝の頭は冷えてゆき、ようやく状況をまともに理解することができぬよつになつた。

あの、京香の顔を思い出すたびに、輝の胸は、つよへつよへしめつけられる。

すぐ傍に 、隣にいたのに、なにもできなかつた。その事実が、輝をいちばん苦しめることとなつた。

もしその場にいなければ、何故自分はあの場にいなかつたのだろう、と悔やむことになるであろう。しかし、その場にいたのにもできなかつた、ということが輝にとつては悔しくて悔しくてたまらないのだ。

いつだつただろうつか。俺は、確かに京香を守ると誓つたんだ。なのに、なんなんだこのやまは。情けないつたらありやあしない。たつた一人の愛する人を守ることもできずに、ただただ悲しみに明け暮

れて、のうのうと生きている。  
ああ、なんて情けない…。

パツパ　！

突然のクラクションに、輝が必死で忘れようとしていた記憶がすべてよみがえつてしまつた。

あの事故のクラクションと、現実で鳴らされたクラクションとが重なる。

パツパ　！

その日は、京香と輝は手をつないで歩いていた。  
そのクラクションが鳴らされたのは、あの文房具店から数十mの場所であった。

ものすごい風を感じたと思った瞬間、京香の身体がつよく引っ張られた。意地でも手を放すまい、と輝は京香の手をいつそうつよく握り締める。そのため輝までもがひっぱられ、一瞬身体が浮いたかと思うと、激しく地面に叩きつけられた。

ガシャーン、と大きな音がして、辺りは今までのことがすべて嘘だつたかのようにひつそりとしている。

手に感触があることを確かめ、輝は恐る恐る目をあけ、京香の無事を確かめようとした。

「おい、京香。大丈夫か？」

返事はない。

前方の電柱にぶつかったトラックの前はペシャンコにしぶれていた。あんなのに巻き込まれたら、ひとたまりもないであろう。

京香の手は確かに輝と繋がっていたが、その身体は今輝が繋いでいる手とは遠くはなれ、路上に無残な姿となつて転がっていた。

「京香…？」

あまりにも急なことすぎて状況が理解できず、ただただ輝は京香の身体から離れてしまつた手を握りしめているだけであった。輝がしばらくそのままでいると、事故の音を聞きつけてか、野次馬やらなんやらが集まつてきて五月蠅くなり、気がついたらベッドの上にいた。

「京香は、死んだ…。あのトラックに轢かれて死んでいった…。」

そうだ、京香は俺のすぐ横で死んでいたんだ。ただ一本の細く頼りない腕を残して。

その、なにもかもが鮮明な記憶として、輝の頭に残つている。

京香を轢いたトラックのナンバー。

そのトラックがぶつかった電柱に張つてあつた張り紙。

京香の、細くて頼りのない腕。

透きとおつた、冷たい空氣。

雲ひとつない空には、数多くの星がまたたいていた。

ぼんやりとした月明かりと電灯に照らされて、白く浮かびあがる無残な京香の身体。

そして、苦しみといつものまつたく知らないかのよつなやすらかな死顔。

京香の身体から溢れ出て、道路を濡らす生暖かい血。それは、輝が今まで見たどんなものよりも美しかった。

すべてのことを思い出すと、急に京香に会いたくなつた。会つてから、いちばんが一方的に見るだけしかできない。それでも、輝は京香に会いたかった。

病院の方へと走りだそうとする輝の背に、ある人の声がかかつた。

「輝くん…。」

京香の母、静江であつた。しかし、彼女からはいつものような活気は感じられず、まるで別人のようにも見える。

ああ、なんで京香が死ななければいけなかつたんだ。

静江を見て、再びその思いと罪悪感が輝を支配しはじめた。静江は、そんな輝の気持ちを察したらしく、静かに涙を流しながら、いつのまにか血が出るほどにつよく握り締めていた拳に手をそつとおいて囁いた。その手はどんなものよりも暖かく、その囁きはどんな音よりも耳に心地よかつた。

「あなたは悪くない。だから、そんなにひとりですべてを抱え込まないで…」

今までの感情が、せきをきつて飛び出した。京香がいなくなつてから、はじめて涙が輝の頬を伝い、このとめどなく流れゆく涙は、まるでどどまるごとを知らないかのようだつた。

誰にもいうことができなかつたひどい罪悪感。

自分が殺したも同然なのに、静江は輝を責めることなく、ただただ輝の背中をさすつていた。

涙とともにすべてを吐き出してしまつた輝は、ただ静江の腕の中で子供のように泣きじゃくついていた。

いくらすげても吐き出しても、たすがに一日で立ち直ることはできない。

静江と話をしなければならないと、頭ではわかつてはいるのだが、身体がそれを拒否しているのだ。

その後も何日かただ身体だけが生きているような生活を“”していった輝であったが、ある日、不思議な夢を見た。

それが、これから輝の人生を左右する、大事なカギとなるのである。

## 夢

重い身体を脱ぎ捨てて、輝は京香のいるところまで、風のように軽やかに走った。

どこまでも走つていけそうで、いつまでも走つていれそうで。

しかし、輝はどんなに走つても京香に会つことができなかつた。

こんな場所に来たのは初めてで、京香がどこにいるかだなんてわからぬけれど、なぜか京香はこっち側にいる、と感じられるのだ。まるでなにかに引き寄せられるように走つてはいるが、まったく疲れることのないと思つていた足に異変があきた。

まるで足がなにかにひっぱられるかのように、重く、その場から動かなくなってしまったのだ。

はつとして輝は足元を見るが、そこは、輝の足をおわえているようなものはまったく見当たらない。

しかし、いつのまにか輝の足元には綺麗な花がたくさん咲いており、その前方には、美しく澄んだ水が流れている、とてもなく幅の広い川が流れていた。

しかし、その澄んだ水を通してその川底が見えるわけではない。その奥には、ただ真っ暗な闇が待ち受けているだけであり、それが輝にはとてもなく恐ろしいと思えた。

身の毛もよだつようなその恐ろしさに、輝はその川から顔をあげ、その向こう岸に田をやつた。

すると、輝の目にあるひとりのよく見慣れた人が映った。

「京香…？」

見間違えるはずもない。あれは、絶対に京香だ。

「京香…？」

ようやく会えたと顔をほころばせ、嬉々として叫ぶ輝だが、京香の表情は哀しみにあふれていた。よく見れば、その瞳からは涙もながれている。

なぜ、泣いているのだろう。あきらかにじつてもその理由が知りたくない、まるで鉛のように重い足を必死に前に出そうとした。ところが、輝の足は依然として動かないままであった。

「なんで…なんでなんだよ…」

自分はただ京香の傍にいたいだけなのに、と輝は嘆く。だが、その望みはけして叶うこととはなかつた。

「…いで。」

京香の声がかすかに聞こえた。

「なんだ、京香。ちょっと待つて、すぐそっちにこってや……」

京香を励まそうとする輝の声は、京香自信の声によつて遮られた。  
「こないでー輝はまだこっちに来ちゃこけないのよ……だから、だから……」

その後は、もうぐぐもつてしまつてなにを言つているかわからなかつた。

輝はただ果然としてその場に立ちすくし、京香の言葉の意味を考えていた。

「まだ、こちへきてはいけない……。」

はつと輝は気がついた。

京香は死んで、まわりは一面の花畠。そして、この一人を遮る恐ろしく大きく長い川。

「京香……。」

ここがどこだかわかつてしまつた輝は、もうなにも言つことができなかつた。

京香はまだ自分に生きていてほしいのだ。いくら一緒にいられるからといって、死んでほしくなんかないのだ。

ひとすじの涙が輝の頬を伝つ。

いつのまにか、先刻までは綺麗な花畠をつくりっていた花がすべて枯れていた。川の中を覗いてみると、その底にはたくさんの骨が転がつっている。

なによりも、誰よりも大切な人。

そんな人が、自分をなによりも大切に思つてくれている。

輝には、京香の思いがひしひしと伝わってきた。

まだ、死んではいけない。いや、死ねない。まだ、自分にはやるべきことが残されている。

京香が死んでから、輝のなかにはじめて前向きな考えがうまれた。そして、輝はくるりと京香に背を向けると、つよく前向きな考えを胸に、死の世界から走り遠ざかつていつたのであった。

目覚めた輝の頬は涙でぬれていた。

もう輝に迷いなどなかつた。

自分はなにを今まで迷つていたのだろうかと呆れてしまつて、つよい信念が今の輝にある。

京香の思いを無駄にしてはいけない。

自分は、誰よりも京香のことを思つて、つよく生きていかなければいけない。

そう、この命の炎が燃え尽きるまで、永遠に。

挫折などしてはいけない。そんな弱い人間であつてはいけない。

もう、この命は自分だけのものではないのだから。古屋京香と鍵本輝、その二つの命を背負つて自分は生きているのだ。

ようやく支度を終えた輝は、今までになじ生き生きとした表情で家をどびだした。

その輝の変化に静江は最初はとても驚いた様子を見せたが、だんだんと輝と話していくうちに、その顔には京香がいた時の笑顔が戻つ

ていた。

「俺は、京香と生きていきます。」

ただ、輝がそう言つたときにだけ、静江は少しだけ顔をしかめた。

「その気持ちは私にとつてはすぐ嬉しい。もちろん京香も嬉しいだらうけど、本当に京香が心から望むことはそれではないと思うの。京香は、あなたに自分の影なんて背負わないで、自由に生きることを望んでいると思うのよ。」

「…はい。」

話が終わつた輝は、静江に案内されて輝は京香の部屋へと入つた。今まで京香が恥ずかしがつて、なかなかいってくれなかつたこの部屋。そこは、実に京香らしい空間であつた。

そして、そのなかに自分と撮つた写真や、自分が贈つたものがあることに輝は気づき、どうしようもなく嬉しくなつてしまつ。まだ部屋に残る京香の匂いに、輝はこらえ切れず涙を流す。京香がそれを望んでいないことなど輝には百も承知だつたが、それでもこらえることができなかつたのだ。

京香、おまえは俺が涙を流すことを望みはしないだろ。だけど…、今だけは許してくれ。今だけは…。

床に座り込んでただ涙を流す輝を静江はしばらく複雑な表情で見ていたが、輝の気持ちを考えてか、そつと京香の部屋を出て行つた。

誰よりもつよく愛し続けていた人。

もう生きた姿を目にすることは一度とない。だからこそ、輝は京香との思い出を風化させたくなんかなかつた。そして、京香をまだ知らない人々に、京香という素晴らしい人がいたことを知らせてあげたかったのだ。

輝はさんざん考えに考え抜いて、とうとう京香のいなくなつた日から三年もが経過してしまつた。

そして、方法を思いついたその日、突然京香の家を訪れた輝は静江に、その気持ちと今自分が実行しようとしていることを正直に伝えた。

そんなことを言つても、静江はけして喜ばないということを、そして思い出したくない辛い過去を思い出させてしまい、哀しませてしまうだらうことも輝は知つてゐる。そして、その日が京香の誕生日であつたことも。

「京香はいなくてしまつた。だからこそ、京香がいたといつ紛れもない事実を風化させてしまいたくないんです。」

はじめは反対していた静江だが、その輝の言葉を聞いて、決心したようだつた。

「ありがとう…。あなたみたいに思つてくれている人がいて、京香は本当に幸せね。」

それは、自分と同じ人生を歩ませたくなかった静江の、本当に心から出た言葉であつた。

京香が生まれてからすぐ、父親の一哉は一人をおいてどこかへ行ってしまった。

静江をもつ妻でないといったまではまだよかつたが、京香までと親子の縁をきると一哉はいいきつたのだ。

幸い、京香はまだ幼くて意味などわからない。ただ、そんな険悪なムードに、ただひたすら泣いていたそうだ。誰も泣き止ませようがあやしてくれる人もおらず、ただひとりで。

だから、京香はその父親のことをまったく覚えていなかつたらしい。いや、京香が気づかないところで、そのことを自然と思い出さないよ'にしていたのかもしれない。

「もしできあがつたら、いちばん最初に見せます。」

それには絶対に京香の父親のことは書かないでおこうと輝は心に決めた。

いくらそのことを書く許可をえたとしても、本当は静江は書かないでいてほしいだろうと思つたから。

「ありがとう…輝くん、本当にありがと。」

静江には、京香には輝のような人がいることが、そして、もし京香が生きていたとしても自分と同じ道を歩まないであろうとこうことが、本当に嬉しかつたのである'。

瞳から涙はこぼれ落ちていても、その顔は本当に嬉しそうであった。

その日から、輝は自分の中に残る京香との思い出を、そして京香を書き続けた。

書きあがり、誤字脱字などのチェックがすべて済み、出版されたのは、もしあのまま生きていたら一十一歳となっていた京香の誕生日であった。

そう、輝があの日からずつと書き続けていたもの、それは京香を主人公としたノンフィクションの話であった。

自費出版というかたちでだされたその十五冊は、なんの注目も集めることはなく終わってしまった。しかし、たとえどんなに人気が出たとしても、輝はそれ以上ださなかつたであろう。この本は、京香の生きた年の分だけ出されたのだ。

そして、今もどこかにあるかもしだれない。

誰かの家や本屋、そして、あなたの心のどこか深いところに…。

## エピローグ

なによりも、誰よりも大切な人。

その人はずつと心の中にいて、自分を思ってくれている。

自分よりも、だけど、その人にとらわれることなく、胸を張つて前進してゆこう。

ひとりでは進めないけれど、ずつと一人で同じ道を歩む」ともできないから。

この本に輝は題名をつけなかつた。

それは、この本を読み、京香のことを知つた人たちに題名をつけて  
もらひつことが望んだ輝なりの考え方であつたのではないだらうか。

この本に題名などない。

だから、どんな題名をつけようが、それはけして間違いではないの  
である。

あなたがそう思つならきつとねうづ。

あなたがどんな京香を思い描こうが、それはあなたにとつては間違  
いではないのである。

しかし、その言葉を口にしたとたん、あなたの題名、あなたの京香  
はとたんに間違つたものになつてしまつ。

だれにも言つてはいけない。

それは、あなただけの物語なのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5347a/>

---

No title

2011年1月27日00時08分発行